

高浜原発 3、4号機の再稼働に断固として抗議し、 反撃の大運動を構築しよう！

関西電力は、1月29日、2月26日に、30年越えの老朽高浜原発3号機、4号機の再稼働を強行しました。昨年の九州電力による老朽川内原発1、2号機の再稼働に続く暴挙です。一方、原子力規制委員会は、40年越えの超老朽高浜原発1、2号機まで、新規制基準に適合としました。許してはなりません。

老朽原発がとりわけ危険であることは、川内原発1号機が、再稼働10日後に早速、復水器冷却細管破損を起こし、高浜原発4号機が、再稼働準備中の20日、1次冷却系脱塩塔周辺で水漏れを起こしたことからも明らかです（裏面参照）。何れも、重大事故に繋がりがねない深刻なトラブルです。このような老朽原発の再稼働にお墨付きを与えた新規制基準が、世界で最もいい加減な基準であることは明白です。

高浜原発では、29日、発電機と送電設備を接続した途端に警報が吹鳴し、再稼働後わずか3日にして、原子炉が緊急停止しました。関電としても命運をかけたはずの再稼働にも拘らず、トラブル続きです。関電が緊張感を持って施設を点検保守する体制にないことを示しています。

原発が極めて事故率が高く、危険な装置であることは、多くが指摘するところです。電力会社、政府、規制委員会がこの警告を無視して再稼働を強行して、事故が起こったら、それは、彼らの故意による重大犯罪です。許してはなりません。

この再稼働の流れを大きな反撃もなく許せば、電力会社、政府、規制委員会は、増長して、伊方原発、大飯原発などの他の原発の再稼働を加速するでしょう。さらに、原発の新設まで企てるでしょう。再稼働された原発の安全対策も怠るでしょう。

老朽原発の再稼働や原発新設を阻止すれば、最悪でも、国内の原発は2030年に13機に、2046年にはゼロになります。原発のない社会を実現できます。断固とした原発全廃の運動を再構築しなければなりません。

原発事故は、自然災害とは異なります。地震や火山噴火のような自然災害を止めることはできませんが、原発事故は止められます。原発は人が動かしているのですから、人が原発全廃を決意すれば良いのです。事故が起こる前に、原発を全廃しましょう。

3月8日(火)、9日(水) 高浜、おおい、舞鶴で アマーバデモを展開します。

12時にJR若狭高浜駅に集合
下さい。京都、滋賀、大阪
から車が出ます。



若狭の原発を考える会有志 (連絡先：090-1965-7102木原、高瀬：090-3034-7391)

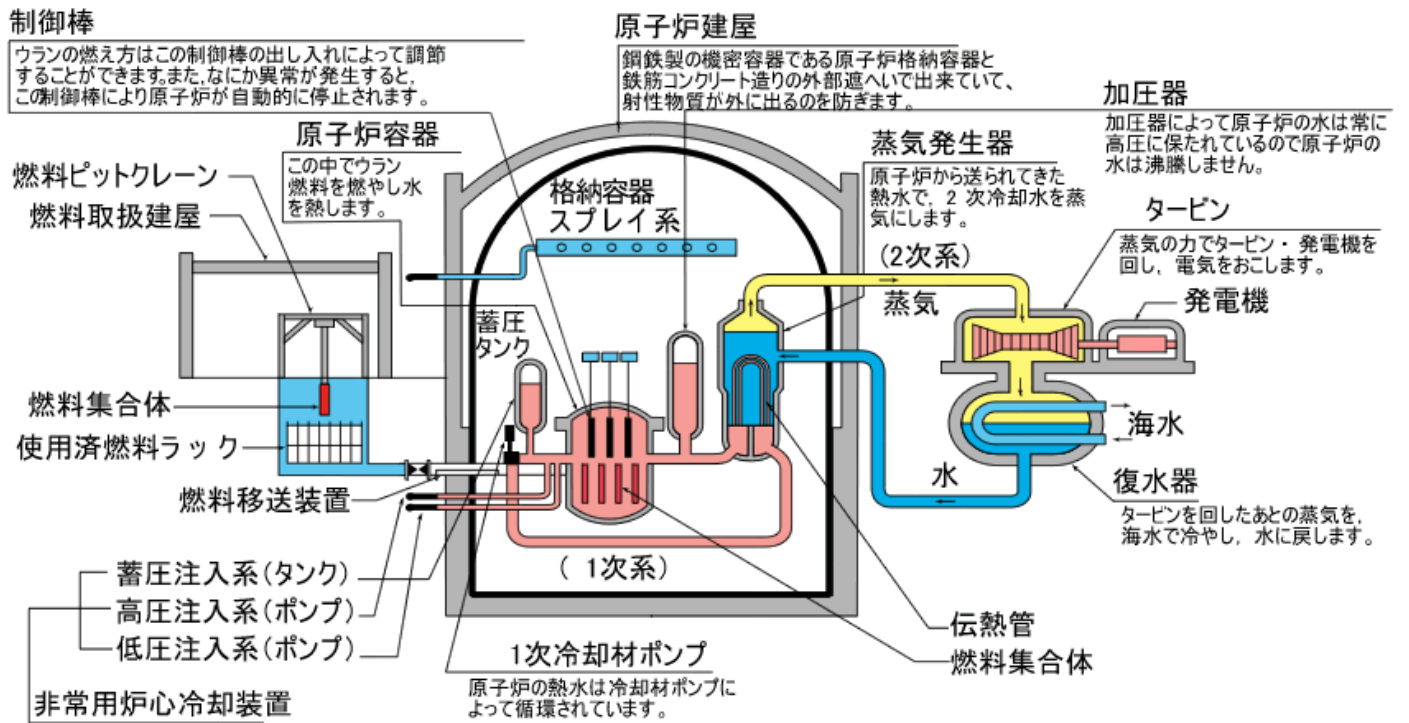
老朽原発は危険度が高い

老朽原発がとりわけ危険であることは、川内原発1号機が、再稼働10日後に早速、復水器冷却細管破損を起こし*、高浜原発4号機が、再稼働準備中の20日、1次冷却系脱塩塔周辺で水漏れを起こした**ことから明らか。何れも、重大事故に繋がりがねない深刻なトラブル。

29日には、発電機と送電設備を接続した途端に警報が吹鳴し、原子炉が緊急停止した。閉電としても命運をかけたはずの再稼働にも拘らず、トラブル続きである。閉電が緊張感を持って施設を点検保守する体制にないことを示している。

*タービンを回した後の水蒸気を水に戻すために海水を流す復水器内のチタン細管(直径25mmの肉薄細管)5本の破損。同細管は、長期に亘り、高温の塩化物イオンを含む海水に接触してきたものであり、その腐蝕(とくに、溶接部)が進んでいることは容易に予測された。このよ

うな細管は3系統、約8万本あり、他の細管の破損も十分危惧される。また、この細管破損によって2次冷却水系に塩分が混入すれば、脱塩装置が設置されているとはいっても、残留の塩によって、2次系の熱交換器(蒸気発生器: 185~255℃の高温)の伝熱細管(インコネル・ニッケル-クロム合金: 1万本以上)の腐食が加速されることが予測される。伝熱細管が、腐蝕・破損すれば、150気圧もある1次冷却水(下記参照)が噴出し(冷却剤喪失)、大事故(メルトダウン)に至る可能性が大。

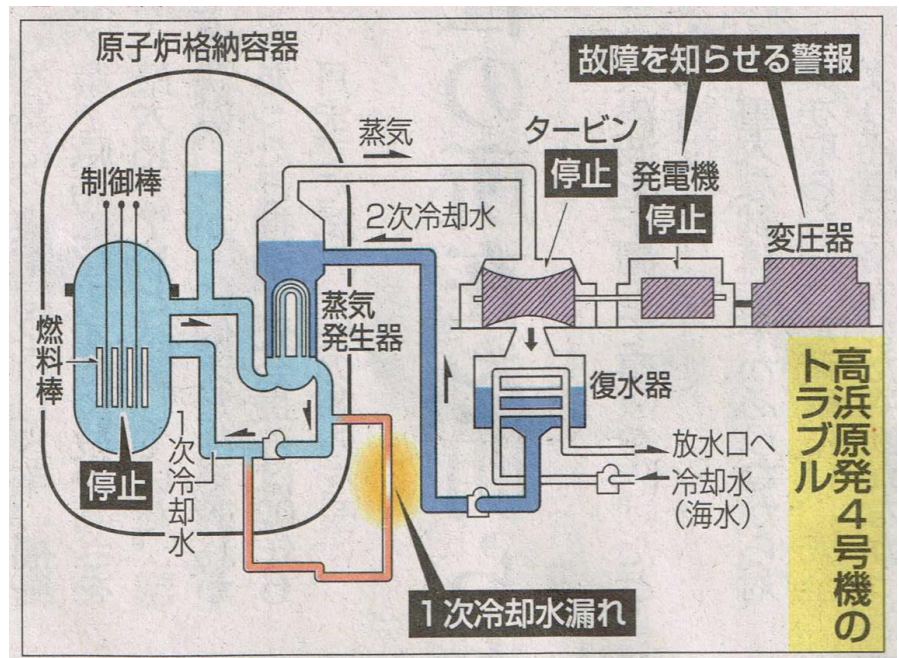


** 高浜発電所 4号機の管理区域内における水漏れと発送電装置トラブルによる原子炉緊急停止

20日 15時42分頃、一次冷却材系統の昇温に向け化学体積制御系統の水をほう素熱再生系統に通水したところ、「一次系床ドレン注意」警報が発信。4号機の原子炉補助建屋の脱塩塔室前の床面に水溜り(約2m×約4m×約1mm:約8リットル)を発見。放射エネルギーは約 1.4×10^4 Bq(約1740 Bq/リットル)。

この水溜り以外にも、床面に漏れた水が原子炉補助建屋サンブ等に回収されたものもあり、これらを全て合わせると約34リットルであり、この放射エネルギーは約 6×10^4 Bq。閉電は、水溜りの推定放射エネルギー(約 1.4×10^4 Bq)は、国のトラブル事象の基準値(3.7×10^6 Bq)に比べ、200分の1以下と発表。22日に**弁のボルトのめ付け不備が原因と発表**。たるみ切った検査。検査しにくい構造。

一方、29日 14時1分頃、多くの報道関係者が詰めかける中、発電、送電のスイッチを入れた途端に、発電機、変圧器に異常電流を検知し、原子炉が緊急停止した。翌日になっても原因不明である。閉電としても命運をかけたはずの再稼働にも拘らず、トラブル続きである。**閉電が緊張感を持って施設を点検保守する体制にないことを示している。**



老朽原発の問題点

- ・高温、高放射線にさらされた配管等の腐食(とくに、溶接部)は深刻。電気配線の老朽化も問題。
- ・コンピュータ制御、機器測定をしているが、コンピュータや計測機器は建設時とは全く異なっている。原子炉の大部分はそのままにして、これらの部分のみ交換。
- ・建設時には適当とされたが、現在の基準では不適当と考えられる部分は多数あるが、全てが見直され、改善されているとは言えない。例えば、基準地震動の過小評価: 安全系と一般系のケーブルの分離敷設の不徹底。
- ・建設当時の記録(図面など)が散逸している可能性があり、メンテナンスに支障。
- ・建設当時を知っている技術者はほとんどいないので、非常時、事故時の対応が難しい。
- ・とくに、ウラン燃料対応の老朽原発でMOX燃料を使用することは炉の構造上問題。